

## 幼児絵本の評価をめぐって

### 一、良書リストの統計による良書リスト

吉岡 剛

はじめに

古来、人は読書を通して広く自己を形成して来た。ソクラテスとの弟子達の対話もまた一つの生きた読書であった。したがって、ロバート・ハッチンズは逆に読書を「偉大なる会話」<sup>(1)</sup>と名づけた。時空を超えた価値ある思想との邂逅はまさに読書を通してのみありうる。

われわれは一般に、その自覚の有無にかかわらず、自分に影響した書物を持っている。現実の社会や生活がもつ人間形成力に併せて、読書による影響を無視することはできない。伝記はそれらの資料に満ちており、読書内容を知ることによってその思想にアプローチすることができる。書物は古くから教養や知性の糧であり、自己教育の最大の資でもあった。そして今、われわれは新たに読書に親しむ。今日、情報化・社会ないしは情報社会にあって、情報量の増大と質の深化は絶えまないその摂取なしには、忽ち見識を陳腐化させ、生き方や創造性にも影響する。他方、情報の主体的操作なしには情報に包摂され、人間性

を一層疎外される。マイクロ・エレクトロニクスの高度の発展は、年々この危険を高めつつあると言える。

したがって、われわれは教育の重要な仕事として、読書生活への志向性を学習者の中に育てる必要がある。この生活態度としての読書への志向性は、テレビの誘引力が強い今日にあっては、一般に幼児期体験から始まる。特に自然の中での遊びが減少し、就学前教育が高度に普及した現状においては、幼児期の絵本との接触形態が最初の志向性に影響する。「全国学校読書調査」によれば、既に小学生において四〇%が、また中学生において四一%が読書を好まない現実がある<sup>(2)</sup>。なお、いわゆる「文化阻隔児」のもつ知的情操的ハンディキャップは、たとえば、ヘッド・スタート計画のごとき特別な教育方法によらなければ、回復が困難であり、逆に、過保護・過干渉・過期待の過剰保育が生み出す意欲の弱体化は、子どもに主体をおいた保育が採用されない限り、積極的なものに変ええない。その方法の一つが、自由な遊びや創造活動であることは無論のこととして、更に、幼児における読書、つまり絵本との接触である。周知の通り古く絵本はコメニウスの手で「絵入り

教科書」として開発された<sup>(3)</sup>。この学習心理に叶った教育方法は、当時画期的なものであり、子ども達に学習の便宜を生み出したが、今、絵本は更に広い価値に結びついて意味を持つものとなっている。知識や感性や想像力は無論、喜びや創造性、そして世界理解や生き方をつくり出すものとして絵本はある。それは単なる玩具<sup>(4)</sup>でも睡眠薬でもない。

なお、児童文学作家・今江祥智の「本はなくとも子は育つ」という見解<sup>(5)</sup>は、言うまでもなく、子どもの日常生活や遊びを重視しながら逆説的に、児童における本の意味を捉えたものと言ってよい。代田昇も言うように<sup>(6)</sup>、これは「文芸批評」ないしはより広く文明批評として、今日の子どもや絵本をめぐる状況を批判して意味がある。事実、今江も、「テレビとか映画とかラジオとか、友だちと遊ぶとか生身の人間の生きざまとかとは違ったもう一つの楽しい世界があるということを見えさせるのが絵本<sup>(7)</sup>」であると述べている。ちなみに真に「本はなくとも子は育つ」のか？ これはあらためて留意さるべき課題であろう。いうまでもなくここでの本は必ずしもすべての本を意味せず、また的確な本の取扱いをも否定しているわけではない。それは、このパロディの元をなす「親はなくとも子は育つ」を考察すれば自明であろう。また更に今日的批判の表現である「親がない方が子が育つ」を「本」にも就いて、質的に「いい加減な本」であれば無い方が良くと解釈すべきであろう。では「いい加減」でない本とはどのような本なのか？ それは拙稿の底を流れる一貫した主題である。子どもの自立に向けて、適度の厳しさを敢えて示す親の愛と類比される「本」とはどのようなものか？

## 一、幼児と絵本、そして選択

「環境が人をつくる」は、今言うまでもなく育児・教育上の常識である。その環境の一つに既述のように確実に本がある。たとえば、前記今江は「講談社絵本」世代の嘆きを他との比較で次のように述べる。「然るべき年齢に然るべき児童文学の傑作を父親がちゃんと買いつけていたという佐藤暁や古田足日の文章を読むと、ちっと舌打ちしたくなるほど羨しく、云々。」つまり、絵本観の枠組がそこで既に決まっていたと言う。年少期に広くどのようなものに触れるかで知力や心理がいかに影響されるかは種々の学問分野が関心を示しているところである。たとえば、藤岡喜愛のイメージ論<sup>(8)</sup>を注目すべきだろう。価値観や日常生活のもろもろの判断は、そこでつくられたイメージと無縁ではない。たとえば絵本は人間能力の原初のものである「情」を動かして感性を育てる。したがって、美しい自然や暖かな人の行為と共に、芸術の一端としてよい絵本が環境にあることは望ましいことである。

しかも、実は子どもの本性が絵本を求めている。各種欲求充足の一端として、知的好奇心や、マリア・モンテッソーリの言う美や秩序への欲求が、あらゆるものに関心を向けさせるが、なかんずく手近の具体物として絵本を手に取りらせる。もちろん、子どもは戸外での仲間遊びを好むが、それと併せて、その本然の姿では絵本を見ることも非常に好む。そして時には、予想外の低年齢で図鑑類を喰いつくように見る場合もある。この内的傾向は、今日の時代にあっては特に留意して

伸ばされる必要がある。なぜなら、子ども達は今、いち早くテレビから過剰な情報を受け、主体的な知的好奇心や積極的探求心を麻痺させられ、受動的となり、画一・一樣のもので満足せしめられるからである。その状況を、自然環境の喪失や、少子家庭・核家族化による人間関係の単純化・稀薄化、物質過剰の省労作等が強める。子どもは喪失と過剰のつばの中で個性を喪失し、エゴの過剰を常態とする。これに知識学習の必要感が圧迫を強め、人間性の破壊を導びく。

この時代環境がもつ問題性は、今、保育所・幼稚園の重点考慮事項ではあるが、実態はなお未だ解消・改善に向けて十分とは言えない。

たとえば、自然との接触や人間関係の豊かな組立て、生活労作の導入はどのようにはかられているか？ より具体的に言えば、子どもに必需の遊具や玩具はどのように準備されているか？ 因みに、ジャングルジムに一枚の厚い板、一本の丸太棒、一巻きの太い綱を加えることによる遊びの力動的展開は行なわれているか？ 子どもにレンガの山を提供して見られる大規模な創造活動は導き出されているか？ 木製大型積木の暖かな触覚は貴重であるが、その経費の限界をカバーするレンガの価値は保育上注目する必要がある。縦九・五cm、横二〇・三cm、高さ五・四cmの適度の大きさ、一個一七五〇gの重量感、適度の堅さ、暖色の色あい、規格品のもつ厳しさと可能性、それらは、コンクリート・ブロックとの対比でも一層きわ立った保育教材と言える。敢えてもじれば、「レンガはなくとも子は育つ」が、有った時と無い時の子どもへの影響はほとんど瞭然である。予想外の低年齢で相互協力が始まり、シンメトリックな構造把握がおこる。運搬による体力と

バランス機能、制作中の協調性、想像性、創造性、そして成就感は、子どもにとって貴重な力となる。<sup>(9)</sup>セメント代りに泥をこね、レンガのかまどで卵を焼く——そこに原始人類が出現し、ロビンソン・クルーソーが現われる。なお、名曲や名画に触れられる保育所・幼稚園がどれだけあるだろうか？

しかもなお、絵本はこれらに尚つけ加えられるべき意味を持つ。そのことに触れた発言は既に枚挙にいとまないが、幾つかを拾いあげてみよう。本田和子は「絵本は子どもにとって文化財とよばれる様々なものの一つである。文化財とのかかわりにおいて子どもの生は外へも内へも広がりを見せ豊かさを増していく。世界の認識が新たになり、人やものとの関係が深まりを示す。一個人の生が人類あるいは民族の歴史という時間的な広がりの中に位置づくことにもなる。」<sup>(10)</sup>と言ひ、渋谷清視は「絵本といい幼児・幼年文学もまた、幼児・幼年期の子ども達の人間的なひとり立ち（自立）をめざした自己活動の力を援助し育てるとともに、その活動自体に喜び（自己充実、自己拡充の喜び）をいだけせながら、そうしてそれが歪みのない道に向かうように示唆していく、そういう機能的役割をになっている文化のひとつである」<sup>(11)</sup>と言う。その他、心理学の立場で中川作一は「絵本をふくむ視覚文化の利点は、子ども達を、形を読み形で考える人間に育てる可能性を持つことである」<sup>(12)</sup>と言ひ、同じく乾孝は「絵本は子どもたちが自分たちの生きる世界をいっしょにもっと深くみつめるためのプラットホームとして生かされる」<sup>(13)</sup>はずのものである、と述べる。なお、絵について、L・H・スミスは次のように言う。「子どもは絵の物語るストーリーに

心をうばわれる時、同時にその絵全体を自分の中に吸収する。もしそれがよい絵であれば、その子は無意識のうちに美的な経験をとり入れたことになるのであって、こうしたことがたびたびくりかえされるならば、それはその子の中に一つの審美眼の標準をつくり、とるに足りないもの、見かけだおしのもの、劣等品にたいする防禦の役目を果たことになるだろう。<sup>(14)</sup>

一般に親の愛は、普段の世話や配慮の他、菓子や玩具の購入、一緒にする遊びなどで示されるが、更に話し聞かせや絵本の読み聞かせが別種の価値ある行動となる。元来、絵本はそうした親ないしは大人の愛の具体物として子どもの中で発達してきたと言える。絵本は何よりも大人の世代の愛のしるしとして人類文化となっているものである。親による読み聞かせは勿論、折にふれての購入は親子間の共感と対話を導き、相互情愛の伏流を構成するものと言って間違いない。

しかし、ひるがえって今日の絵本の氾濫はどうであろうか？ 年々の出版点数量が生む店頭の実状は、特に営利的絵本を手近に配置して親達に安易に購入させることとなっている。鳥越信の見るところでは「四分の三は悪い本です。四冊のうち三冊までは、悪い本<sup>(15)</sup>」を買ってしまうことになるのです。」<sup>(16)</sup>ということになる。しかも絵本の年間新発行点数は一〇〇〇に及ぼうとしているのである。今や、絵本の選択は、その質と価格の両面を加えて、親は勿論、保育者や図書館司書にとっても困難な作業の一つとなっている。子どもの好みによる選択にも一応の意味はありながら、それだけに委ねられない現実が子ども達の選ぶ本の中に明白であり、店員は的確な示唆を行なう能力をほとんど

ど身につけていない。言うまでもなく、選択の際、大人自身がその本に感応するところあれば、その本が良いと言えないこともない。しかし子どもにとって大人のその感応はどういう意味をもつのだろうか？ しかも的確な感応は簡単に身につくものではない。成人に到る迄に身につけた諸々の教養・趣味・知識・理解力、そして価値感を総動員しても、真によい選択ができるかどうかは疑問なしではない。まして専門家による作品への優れた批評文を読むと、その困難性は明らかとなる。たとえば、鳥越信による二種の『ちからたろう』の比較分析<sup>(17)</sup>は容易に一般人にできるものではない。人はしたがって、新聞・雑誌の書評を見、信頼できると考える人（たとえば教師や司書）に尋ね、また著名な監修者や作家・画家・出版社名に依拠する。しかし果してそれで不安なく選択ができるかどうか？ なぜなら、後に見るように、絵本評価は評者によって種々異なるからである。結局は自らの芸術観・教育観をもって模索し、試行錯誤を繰り返しながら体験的研究を重ねる以外にはない。そしてそれが少なくとも現実の姿であろう。

## 二、選択の手がかりとしての良書リスト

前記ロバート・ハッチンズは、欧米知識人の必読図書として、西欧古典をほぼ網羅した広範なリストを提示している。<sup>(1)</sup>同様、すべての学問分野が専門的熟達に向けて基本的文献を持ち、時にそれらをリスト化していると言ってよい。そうした図書リストは、一般に、(一)利用のための実際の意義、と(二)研究的意義を持つ。つまり、リストは手がか

りを与え、勞力經濟的に、また累進的体系的に實際の応用力を高めるが、一方、原点に立ち歸つて物事を深める資料性を持つ。たとえば、

一次統計リスト（昭和四三年作成）の一部分であるが、推薦者間の推薦絵本の相違を明示して、推薦者の思想や芸術観を探索させる。

表1 子どものための100さつの本

—良書リストの統計から得た良書リスト—

[illegible]

26	あ お い 目 の こ ね こ	5～7	瀬 田 貞 二	福 音 館	450	8	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	あ ふ り か の た い こ	4～7	瀬 田 貞 二	福 音 館	280	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28	三 び きの や ぎ の が ら が ら ど ん	3～5	ブ ラ ウ ン	福 音 館	380	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29	そ ら い ろ の た ね	4～5	中 川 李 枝 子	福 音 館	280	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	と ら っ く と ら っ く と ら っ く	2～4	渡 辺 茂 男	福 音 館	280	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	1 0 0 ま ん び きの ね こ	4～7	ガ ア グ	福 音 館	280	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32	ま り ー ち ゃ ん と ひ つ じ	4～6	フ ラ ン ソ ワ ーズ	福 音 館	180	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33	も も た ろ う	4～7	松 居 直	福 音 館	380	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	か し ろ う さ ぎ と く ろ う さ ぎ	5～7	加 古 里 子	福 音 館	280	7		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35	し ろ う さ ぎ と く ろ う さ ぎ	4～7	ウ イ リ ア ム ズ	福 音 館	380	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36	だ い く と お に ろ く	4～7	松 居 直	福 音 館	280	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37	た ろ う の お で か け	4～7	村 山 桂 子	福 音 館	280	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	の う さ ぎ の フ ル	5～8	リ ダ	福 音 館	350	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39	ふ し ぎ な た い こ	4～7	岩 波 編 集 部	岩 波	180	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40	マ ー シ ャ と く ま	4～8	ロ シ ア 民 話	福 音 館	280	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41	海 の お ば け オ ー リ ー	4～7	エ ッ ツ	岩 波	200	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42	お や す み な さ い フ ラ ン シ ス	3～6	R・ホ ー バ ン	福 音 館	350	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43	か も さ ん お と お り	3～7	マ ッ ク ロ ス キ ー	福 音 館	450	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44	ご き げ ん な ラ イ オ ン	4～7	フ ェ テ ィ オ	福 音 館	350	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45	て ぶ く ろ	3～5	ウ ク ラ イ ナ 民 話	福 音 館	280	6		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46	は た ら き も の の じ ょ せ つ し ゃ け い て い	4～7	パ ー ト ン	福 音 館	350	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47	も も い ろ の き り ん	5～8	中 川 李 枝 子	福 音 館	530	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
48	も り の よ う ふ く や	4～7	ラ チ ョ ク	福 音 館	280	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49	ゆ か い な か え る	2～5	キ ー プ ス	福 音 館	250	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50	ゆ き む す め	4～7	ロ シ ア 民 話	福 音 館	380	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(註) 統計に使用した書物 (50音順)

(51以下略)

石井桃子他 (子どもの本研究会) : 私たちの選んだ子どもの本 (～昭和41.6)

今江祥智・古田足日: わたしたちのすすめる本 (昭和43夏作成プリント)

草野正名: 子どもを伸ばす読書—幼児から小学生まで— (三省堂 昭和43.3.20)

斎藤尚吾 (日本親子読書センター編) : 子どもに読ませたい本 (パンフレット)

瀬田貞二: 絵本とこども (福音館 昭和41.1.1)

鳥越信・森久保仙太郎: 三才から六才迄の絵本と童話 (試文堂新光社 昭和42.2.28)

滑川道夫 (大日本女子社会教育会) : 幼児向絵本目録 (パンフレット)

羽仁説子他 (日本読書指導研究会) : 子どもになにを読ませたらよいか (評論社 昭和43.1.20)

無着成恭: 子どもの本220選 (福音館 昭和39.6.1)

矢崎源九郎・神宮輝夫: 子供に読ませたい本 (社会思想社 昭和41.12.15)

全国学校図書館協議会必読図書委員会編: 新訂 何をどう読ませるか 第一群 小学校低学年 (全国学校図書館協議会 昭和39)

大阪市立中央図書館児童図書選定委員会編: 選定児童図書目録 (42年度および43年度)

具体例を挙げれば、No一九の『シナの五にんきょうだい』や、一七の『おやすみなさいのほん』は多数の者に推薦されているが、今江は何故これらを推さないのだろうか？ 今江がいろいろな所で書くものを読んでいくと、彼が人種問題や子育て方法に関して、他とは異なった見解を持っていることが判る。このようにリストによって今江児童文学への別のアプローチが可能となる。言う迄もなく、絵本の表現技術上の観点で推薦者個々の考えを検討することもできよう。今江はいみじくも「リストの比較は編者の顔ぶれと併せて考えればなかなか面白い知的ゲームの感がないではありません。」<sup>(18)</sup>「もともと、ブックリストは編者の選択基準プラスその知識経験の総合力テストの感があります」と言っている。特に、子ども達が好む本をリスト化して比較照応させると、どのリスト作成者が最も子どもの立場で本を見ているかが明瞭になるだろう。

絵本は一種の複合芸術であって、絵（形・色など）文（内容・表現など）形（大きさ・型など）、そして文字（活字の大きさ・分量など）製品度（堅牢さ・手軽さなど）など、個々に、また総体として評価対象になるものである。つまり絵本は、表紙や装丁は無論として、絵と文の一致といった表現の細部においても批判・評価されるものであり、一般文学とは別の要素をもつ。また更に、発達過程上の子どもがその受け手であることにおいて、評価が一層困難となる領域である。後述の『ちいさいおうち』の版型を大きくすることの意味、『八郎』を教科書に採用し、絵の一部を削ることの影響、また、横長本の持つ効果等については、一般文学に同様の検討材料を見出せない。その意味で

絵本とは評価が非常に困難なものであり、したがって評価結果が種々にずれてくるものである。たとえば、昔話や民話の再話、そして翻案は、内容は無論として表現上でも評価をわかれさせる。有名な『ちびくろさんぼ』をめぐる見解の相違がそれである。絵の評価に至っては一層の困難性が明らかである。赤羽末吉や田島征三、瀬川康男など自ら絵本画家である人達が絵に対しても理解や厳しさは、余程高度の美術鑑賞眼を持たぬ限り一般には足もとにも寄れないものである。翻訳についてまた然りである。

ここに、絵本に対する専門的批評家の出現が望まれることとなる。その専門的批判力で示唆されるところなければ、一般に人は選書の際、自信のなさを再生産しつづける。優れた作家であり、訳者である上、研究者でもある砂田弘ですら、絵本評価についての自信のなさについて触れ、「その自信のなさはよくが絵本についていまだに基本的な考え方を確立していないためでもある」とし、それが「なによりもまず、ぼく自身が幼年時代にいわゆる『すぐれた絵本』に出会わなかったということに由来するのではないかと思う」とつけ加える。なお、したがって、彼は他面で「研究家たちの明快な批評をきく度に、果してそれらの批評がどこまで子どもの世界にふみこんでいるのか、といった疑念にとりつかれてしまう。」<sup>(19)</sup>とも言っている。

このような状況の中では、期待される批評家は少なくとも第一段階として彼自身の判断に一貫して流れる評価基準と、その尺度の実際的使用方法を具体的に明示することを求められる。その試みの前例として、たとえば、モームの、文学一般に関する基準を適用することを示

唆するいぬいとみこの考<sup>(20)</sup>えや、桑原武夫の「文化価値論」に手がかりを検討する岡田純也の考<sup>(21)</sup>えが留意される。また阪本一郎の試みを考察することも必要であろう。阪本は次のような一八項目を評価点として提案し、自ら事例を検討している。<sup>(22)</sup>〔一〕、物語へ主題Ⅴ一、獨創性、二、教育性。へ構想Ⅴ三、單純性、四、興味性。へ性格描写Ⅴ五、識別性、六、突出性。へ叙述Ⅴ七、用語性、八、文長性、九、親和性、一〇、健全性。〔二〕、描画、一一、美感性、一二、同調性、一三、想像性、一四、写実性、一五、人物性、一六、刺激性。〔三〕、印刷・造本、一七、明瞭性、一八、堅牢性。これが十分使用に耐えうるかどうかは今後の検討を広く続ける必要があるが、既に発表された大城宜武の研究はその資料になりえよう。その他、国分一太郎の、一、芸術性、二、興味性、三、段階性、四、明快性、五、生活性。上笙一郎の文学性・教育性・娯楽性・大衆性。<sup>(25)</sup>横谷輝の單純性・明快性・段階性。石井桃子他『子どもと文学』の「おもしろく、はつきり、わかりやすい」本。<sup>(27)</sup>そして日本子どもの本研究会の「選定図書を選ぶ際のおおまかな目やす」<sup>(28)</sup>〔昭和四四年〕や、全国学校図書館協議会絵本委員会の「絵本の選定基準」<sup>(29)</sup>が注目される。なお、筆者もかつて簡単にまとめたことがある。<sup>(30)</sup>

ところで、子どもが好む本、喜ぶ本こそが「良い」本であり、万人共通のものとして一般化はできない、とする考え方も一面で正しい。岡田純也は「絵本の価値はもともと読者の子どものと相対的なかわりの中で生じるのだから、一対一、つまり各人各様という混沌としたものである。」<sup>(31)</sup>と言う。確かにそうであって、評価は究極のところこの形で意味を持つ。岡田は続けて「向上への意欲、快感を求める心、日常

的な現実からの離脱の欲求、それに加えて適度な知識の体系への期待などが絵本にかかわる幼児の心に内在し、それが誘い出された時にこそその絵本の価値あるいは反価値が与えられる」という。しかし、岡田が完全にリストを否定しているわけではないと思う。リストの絶対性を主張しない限りにおいてリストの意味を認めるものである。確かに子どもの内的な力への信頼は注目すべき児童観であり、教育の基本的態度であるが、具体的な絵本選択に関して子どもの眼が正しく確実であるとは、一般に断言しえない。今日にあっては、成長の過程で判断力が歪み偏っている場合もある。また、子どもに「合った」ものこそ意味がある、という見解も、実際には、選択に当って子どもだけを主体におく場合、結果は必ずしも十分ではなく、一方、大人が判断するとなると「合った」とは具体的にいかなる意味なのか、また合った本のすべてが良い本と言えるのか、という点で更に検討を行なう必要がある。「合った」とは、微妙な点では結果論的なものでしかない。したがって、前段階として選択の手がかりに良書リストが必要であることはやはり否定できないであろう。なお、「合った」とは、子どもの好悪、趣味、性格、そして興味・関心、生活の実態、要求、更に問題意識等に関してであり、その限りで教育の原理として教育効果に結びつく可能性が大きい、それは子どもが即、よい選択眼を持っているということの意味しない。それは子どもが個々に主体としての或種の条件を持っているということにすぎない。しかも、「合った」から生み出される教育効果の質は常に高いものとも言えない。それは子どもとテレビ番組の関係を見れば自明である。より良い成果が生まれる



ためには、「おもしろそうだ」「好ましい」と注目する感性と、夢中になる際の理性の高さが伴う必要がある。喜びが質の良い感動によって起こされ、そのために関心が持続し、更に発展へと志向させられる場合でなければ、おもしろさや好ましさ、喜びは単なる日常茶飯の心のゆれのみに終わってしまう。

子どもはモンテッソーリも言うように、また文明史が人類そのものについて語るように、価値に向かつての傾向性を豊かに持つ。秩序やバランス、明快さ、豊かさ、穏やかさ、起伏の妙、不思議等々、およそ児童文学批評の中で多用される用語のすべてに關して傾向性をもつ。そして時には驚く程の直観のひらめきで、それらを高い水準で捉えることもある。しかし、その蓋然性と持続性は一般に小さく、総合的判断力は弱い。しかも今や幼年期からの過剰情報にとり囲まれて、既に成長の過程で判断が歪み、劣り、粹にはまっていることも留意されねばならない。子どもの内的力への信頼とその現実の認識能力とはまた別である。言うまでもなく、書店の店頭で子どもを置いた場合と、選択のふるいを一度は通った本の置かれた児童図書館や文庫、教育施設の中での子どもの位置は明らかに違う。絵本の選択は、したがって、子ども自体に対する研究を一層深め、子ども達の想いや欲求を的確に把握するという教育の本道を一方で重ねながら、他方、大人がやはり引続き配慮して行くべき仕事である。それは「与える」という行為では全くなく、「準備する」ということである。環境として「質」の高い絵本を「提供」していくことである。読むべきとして「与える」のではなく、これらの中から選ぶことが望ましいのではないか、という提案である。

それが一覧表として整理されると、リストとなり、更に具体的に書棚に並べられると、教育的な環境整備となる。児童図書館とはまさにそういうものである。子どもの手のみで造られる図書館があるとして、それが必ずしも質の高いものになるかどうか、現状では疑問なしではない。しかも注意すべきは、渋谷清視も言うように、「子どもの読書実態の内容・傾向性——子どもが関心・興味を持ち喜ぶ本というものは、実は彼らをとりまく社会の文化的習慣・環境や伝統によって規制され影響されて生じてくるもの」であり、「全く基本的には大人のつくり出した文化の世界の投影ないし反映である」ことである。大人の一般水準が問題であり、まさに大人が絵本のリストを必要としていると言える。しかも大人の判断には既に或種の固定観念が作られており、時代や社会は勿論、子ども達の動向を歪み捉える可能性もある。したがって、リストも、準備される図書館も、幅のある広いものである必要があり、又それに準拠し、利用する場合の大きさは適切に確保されねばならない。いかに高度の努力を傾注しても、良書選択の分野には一般に落ちこぼしもありうる。また発行されるすべての書物に触れ、検討し、評価できない個人の限界もある。したがって、「おちこぼれ良書リスト」が別に個性的判断で組立てられねばならないことも意識されるべきであろう。このことは、いわばアイデアに到達した優れた絵本批評家を希求することでもある。

### 三、良書リストの限界、統計リストのメリット

以上のようにリストの必要を強く主張してはみても、初めからリスト作成を無意味な試みと見る作家、画家も当然いる。読書が全く個人的活動であると思えば、選書は本人の自由であり責任であって、他の関与するところではないからである。たとえ対象が子どもであっても、このことは十分主張しうる。純粹培養には問題があるとも言いうる。まして、リストはこれ迄触れた留保事項に加えて、以下に触れる多くの限界も持つからである。しかしそれでも親が保育者が司書が作家が、そして画家が一度リスト作成を試みると、少なくとも自分の好みや思想の確認になり、成長・発展の検証となることも否定できない。編集者（出版社）にとっては、その出版（販売）カタログがまさに彼（社）の良書リストに他ならないはずである。もっとも此の場合、他の要素も混入するが。

一般に指摘できる絵本リストの利用上の限界は次のようである。

(一)出版された市販中のすべての書物を網羅していない。特に新刊書については採択に到る迄の時間的問題で利用できず、新聞・雑誌等の書評欄に頼らざるを得ない。また時に、無名著者、新人、弱小出版社については充分眼配りがなされないことがある。一方、リストによっては、同一作者のものを数的に限定する場合があり、本来取り上げられるべきものが落ちている場合もある。

(二)リストは一般に書誌的事項のみの場合が多く、内容に十分触れることをしていない。内容への言及がある場合でも紹介にすぎず、具体的評価に欠けることが多い。たとえば「マンガ風」という用語は「おもしろい」と「安っぽい」の両義があり、それ自体の概念規定に関

して、より高度のものが必要であろう。あるいは、いわゆる常套語で逃げることをせず、もっと具体的に説明すべきである。

(三)また、リストは確かに良書を良書として取りあげてはいても「良」なるものもつ「質の度合」が不明確な場合が多い。しかも、それぞれのリストによって選択の基準が必ずしも一定していない。順位や他の判断基準が示されていない場合は、挙げられた絵本数が多くなるにつれて、その利用価値は減少する。

(四)一方、批評文が付記されている場合も、問題点・批判点については殆んど触れられておらず、触れている場合もありきたりにすぎないことが多い。たとえば、どこそこに問題があり、子どもへの提供においてはこういう留意が必要であるか、また、再版の際の検討事項は何であるかを問題として提起していないことが多い。

(五)リスト作成にかかわる作成者の思い入れや努力、つまり信頼性がどの程度あるかが不明な場合が多い。簡単に意見を寄せ集めたものから宣伝的なもので、実情としてその作られ方に問題があることを否定できない。つまり、リスト作成過程の説明と選択基準が明記されていないければ、利用信頼度は低いものと言える。

(六)最後に、個性的にすぎるリストが有りうること——現実にはむしろこれが一層期待されるべきであろうが、公開され、利用される可能性のある以上、ここでは児童観、文学観、教育観の確かな説明が伴わなければならない誤解を招くか、別のリストを併用する必要がある。具体的に言えば、絵本において画家を主体におくか、絵は単なる挿絵にすぎないのか、絵本における思想性はどのように考えているの

か、つまり「絵本とはなにか」についての作成者の見解がまず必要となる。さもないければ極端な場合、馴れ合いリストが提供される危険性もある。

これらの限界は明らかに「絵本とは何か」という基本的問題をリスト作成者に問うものである。このことは逆に既述したようなリスト作成の意義にも関係してくる。

以上に述べた良書リストの限界を方法的にカバーし、より信頼度の高いものにする一つの便宜的な手段が有る。それが拙稿で試みた「良書リストの統計による」方法である。無論これにも後述するような別種の限界を否定できない。しかし、統計が生み出す長所は、

(一)リスト内容がより客観化されることである。つまり、資料数が多ければ多い程そのことが言える。

(二)また、集計結果による数字は、評価の度合をその多寡で示すことになる。二六のリストによる推薦が一〇のリストのそれよりも高い水準にあると判断して大きな間違いではない。

(三)以上のことから、或推薦数以上で被推薦書を限定すれば、限定の高さに応じてそこに掲げられた本が良書であることの誤差が少なくなり、信頼性が高くなる。

四一方、統計を或時期区分（たとえば五年区分）で経年的に長期にわたって試みれば、良書の消長が把握でき、たとえば古典と言うべきものを指摘しうる。

五このことは更に、絵本をめぐる時代傾向、たとえば絵本観や、著者

や画家の各種動向、内容（主題・方法）の変化、出版社の興亡など、広く文学史・教育史につながる研究資料を提供することにもつながる。

六また、別種のリスト、たとえば子どもの好む絵本のリストやベスト・セラー・リストとの比較などにおいて、種々の興味ある問題を把握させ、絵本評価の基準や方法に示唆を提供するだろう。

なお、統計リストの持つ限界は次のように考えられる。

(一)数的把握に重点が置かれる結果、一般受けする本はリスト中の上つて来ても、個性的なものが抜け落ちる可能性がある。とは言え勿論統計リストの上位のものの普遍的優位性はゆるがない。

(二)一部で、単発リストの限界を増幅する可能性がある。たとえば、無名作家・画家・出版社のものが、利用したリストの質によって完全に抜け落ちることになる。また、統計時直前の新刊書が拾い上げられない危険が一層強い。

(三)使用リストの文献学的検討が困難であるため、統計結果の研究的価値が減少する危険性がある。たとえば、リスト作成者に偏りや重複がないかどうか、特に数人の合議による団体リストと個人作成リストを一对一の等価扱いすることの問題性はないかどうか、基礎資料の信頼度の問題である。この点に関して拙稿の試みも未だ必ずしも十分ではない。

なお、「この一冊」という程に徹底的に印象づけられた本のリストを多数からの聴取を通して作成する必要がやはりある。いずれにしろ、リ

スト活用上の絶対視、特に子ども達への良書の押しつけは十分自戒すべきである。つまり、子ども達の感応の主体性を維持発展させ、リスト上の質の高い絵本と数多く触れ合わせることによって、内的に身につく良書選択能力を期待すべきであろう。この事は、子どもと共に絵本を読み親しむ親や保育者に対しても該当する。彼らの選択能力向上に一つの手がかりを与えることがリストの主眼であり、子どもの反応を注視する姿勢を通して、逆説的ではあるが、良書リストの無用化をはかることが実は良書リストの一つの目的なのである。

四、本稿中の作成リストについて

本稿で発表する「良書リストの統計による良書リスト」は、これ迄三回にわたって作成して来たものである。「第一次」統計リストは昭和四三年（一九六八）、聖母女学院短期大学家政科生活専攻生数人の協力を得て行なったものであり、大学祭において、学生や一般参観者に配付したものである。

表2 各次別良書リストの統計による良書リスト(上位約50冊)

第 1 次 (昭43年)			第 2 次 (昭50年)			第 3 次 (昭57年)		
全 87 冊			全 131 冊			全 143 冊		
No	書 名	推薦数	No	書 名	推薦数	No	書 名	推薦数
1	かにむかし	16	1	ちいさいおうち	19	1	てぶくろ	27
2	ちいさいおうち	15	2	かにむかし	18	2	あおんときいろちゃん	26
3	いたずらきかんしやちゅうちゅう	15	3	きかんしややえもん	16	3	はなをくんくん	23
4	きかんしややえもん	15	4	ぐりとぐら	15	4	ねずみくんのチョップ	22
5	どろんこハリ	14	5	かばく	15	5	ろくべえまってるよ	22
6	ふしぎなたけのこ	14	6	いたずらきかんしやちゅうちゅう	15	6	ぐりとぐら	20
7	いいややえん	14	7	おおきなかぶ	15	7	しろいうさぎとくろいうさぎ	20
8	しずかなおはなし	14	8	ふしぎなたけのこ	15	8	しろりのな	20
9	ぐりとぐら	13	9	ひとまねこ	15	9	かばく	19
10	かばく	13	10	どろんこハリ	14	10	三びきのやぎのからがらどん	19
11	はなのすきなうし	13	11	三びきのやぎのからがらどん	14	11	おおきなおきなおいも	19
12	こどもがはじめてであう絵本	13	12	しろいうさぎとくろいうさぎ	14	12	かいじゅうたちのいるところ	19
13	チムとゆうかんなんちようさん	13	13	こどもがはじめてであう絵本	14	13	ちいさいおうち	18
14	おかあさんだいすき	13	14	しょうぼうじどうしゃじぶた	14	14	すてきな三にんぐみ	18

15	こねこのぴっち	13	15	やまんばのにしき	14	15	はせがわくんきらいや	17
16	おおきなかぶ	12	16	いやいやえん	14	16	いたずらかんしゃうちゅう	16
17	ひとまねこびる	12	17	かもさんおとお	14	17	スーホの白い馬	16
18	ねむりひめ	11	18	はなのすきなうし	13	18	モチモチの木	16
19	ももたろう	11	19	チムとゆうかんせんちょうさん	13	19	どろんここぶた	16
20	あおい目のこねこ	11	20	おかあさんだいすき	13	20	ふたりはともだち	16
21	おやすみなさいのほん	11	21	てぶくろ	12	21	おいしいのぼうけん	16
22	ちびくろさんぼ	11	22	はなをくんくん	12	22	よあけ	16
23	ちいさいねこ	11	23	ねむりひめ	12	23	どろんこハリー	15
24	マーシャとくま	11	24	こねこのぴっち	12	24	おおきなかぶ	15
25	どうぶつのこどもたち	11	25	おばあさんのひこうき	12	25	ちからたろう	15
26	三びきのやぎのがらがらどん	10	26	三びきのこぶた	12	26	わたしとあそんで	15
27	もりのなか	10	27	もりのなか	11	27	かさじぞう	14
28	しょうぼうじどうしゃじぶた	10	28	ちからたろう	11	28	おしゃべりなたまごやき	14
29	だいくとおにろく	10	29	ももいろのきりん	11	29	フレデリック	14
30	まりーちゃんとひつじ	10	30	ゆきのひ	11	30	ふきまんぶく	14
31	100まんびきのねこ	10	31	しずかなおはなし	10	31	ぼちぼちいこか	14
32	ふしぎなたいこ	10	32	スーホの白い馬	10	32	ふしぎなたけのこ	13
33	とらくとらくとらくとら	10	33	あおい目のこねこ	10	33	わたしのワンピース	13
34	あふりかのたいこ	10	34	だいくとおにろく	10	34	しばてん	13
35	しろいうさぎとくろいうさぎ	9	35	だるまちゃんとてんぐちゃん	10	35	やまんばのにしき	12
36	たろうのおでかけ	9	36	ちびくろさんぼ	10	36	スイミー	12
37	そらいろのたね	9	37	プレーメンのおんがくたい	10	37	ピーター・ラビットのものがたり	12
38	シナの五にんきょうだい	9	38	おやすみなさいフランス	10	38	おじさんのかさ	12
39	てぶくろ	8	39	おおかみと七ひきのこやぎ	10	39	ぞうのボタン	12
40	かもさんおとお	8	40	ちいさいモモちゃん	10	40	はなのすきなうし	11
41	いたずらこねこ	8	41	うんがにおちたうし	10	41	しょうぼうじどうしゃじぶた	11
42	ももいろのきりん	8	42	王さまと九にんのきょうだい	10	42	ねむりひめ	11
43	ききみみずきん	8	43	三びきのくま	10	43	だるまちゃんとてんぐちゃん	11
44	ゆかいなかえる	8	44	ももたろう	9	44	11びきのねこ	11
45	かわ	7	45	かさじぞう	9	45	ごろはちだいみょうじん	11

46	ごきげんならいオン	7	46	おやすみなさいのほん	9	46	はけたよはけたよ	11
47	海のおばけオーリ	7	47	いたずらてねて	9	47	おはけたのバーバ	11
48	はたらきものじゃせつしやけいてい	7	48	たろうのおでかけ	9	48	あ	11
49	のろまなローラー	7	49	わたしとあそんで	9	49	ち	11
50	アソビとライオン	7	50	ちやんとひつじ	9	50	ロージーのおさん	11
(6以下略)			51	アソビとくま	9	51	はらぺこあおむし	11
			52	ごきげんならいオン	9	(10以下略)		
			53	おにたのぼうし	9			

(8以下略)

その特徴は既に表一に一部示したように各絵本毎に推薦者を明示したものである。なお、表二の第一次統計リストは後の追加を含む下記リストで修正し、五〇位迄を抜き出したものである。したがって当時発表のものとは一部異なっている。

第一次 (資料リスト)

- 一、無着成恭『子どもの本二〇選』(福音館 昭三九)
- 二、瀬田貞二『絵本と子ども』(福音館 昭四一)
- 三、石井桃子他『私たちの選んだ子どもの本』(子どもの本研究会 昭四一)
- 四、矢崎源九郎・神宮輝夫『子どもに読ませたい本』(社会思想社 昭四一)
- 五、福田康夫・鈴木喜代春『新しい読書指導』(新評論 昭四一)
- 六、鳥越信・森久保仙太郎『三歳から六歳迄の絵本と童話』(誠文堂新光社 昭四二)
- 七、今江祥智・古田足日『わたしたちのすすめる本』(昭四一 夏・秋プリン)
- 八、草野正名『子どもを伸ばす読書―幼児から小学生まで―』(三省堂 昭四三)

幼児絵本の評価をめぐる

- 九、羽仁説子他(日本読書指導研究会)『子どもになにを読ませたらよいか』(評論社 昭四三)
- 一〇、代田昇・増村王子『父母と教師のための読書相談室』(鳩の森書房 昭四三)

- 一一、関 英雄『新編児童文学論』(新評論 昭四三)
- 一二、斎藤尚吾(日本親子読書センター編)『子どもに読ませたい本』(パンフレット)
- 一三、滑川道夫(大日本女子社会教育会)『幼児向け絵本目録』(パンフレット)
- 一四、全国学校図書館協議会必読図書委員会編『新訂 何をどう読ませるか』(昭三九)
- 一五、大阪市立中央図書館児童図書選定委員会編『選定児童図書目録』(昭三八年版、四三年版)
- 一六、広島市児童図書館よい本をすすめる母の会『一九六六子どもの心を育てる良書目録』(昭四一)

「第二次」統計リストは、第一次リスト作成後七年、昭和五〇年(一九七五)に、前回リスト作成以後発表された良書リストを蒐集統計したものであり、赤穂市教育委員会による国際児童年記念講演会で資料

として配付したほか、各地の保育所・幼稚園・図書館・母親学級・保育者研修等で啓蒙資料として使用したものである。その特徴は使用資料リスト数が多いこと、および、それらリストに図書館発行のものが比較的多かったことである。なお、下記使用リストにはその後の追加がなされており、ここに上位一部を転写した表は当初のものとは多少異なっている。

—— 第二次 —— (資料リスト)

- 一、坪田譲治他『子どもの本の事典』(第一法規 昭四四) 滑川、松居直、関、西郷竹彦、渋谷清視、横谷輝他
- 二、堀内輝三『本を読む子の世界』(講談社 昭四四)
- 三、今江、中川正文、上野瞭、新村徹他「わたしたちがすすめる本」(昭四五、四六、四七、四八、四九)
- 四、滑川道夫編(日本読書指導研究会)『家庭の読書指導』(国土社 昭四五) 谷川澄夫作成リスト
- 五、増村王子編『新しい読書教育』(国土社 昭四七) 代田かつみ作成リスト
- 六、松居直『絵本とは何か』(日本エディター・スクール出版部 昭四八)
- 七、渋谷清視『父母と教師のための子どもの本ひろば』(有信堂 昭四六)
- 渋谷清視『幼児のための絵本と文学』○歳から七歳まで(金の星社 昭四九)
- 渋谷清視『絵本とおはなし』(鳩の森書房 昭四九)
- 渋谷清視・横谷輝『子どもと文学』(鳩の森書房 昭四七) 渋谷作成リスト
- 八、若山憲『絵本の見かた創り方』(すばる書房 昭五〇)
- 九、鳥越信『子どもの本の遊び方、与え方』(三省堂 昭四八)
- 一〇、日本子どもの本研究会『子どものための一〇〇〇冊の本』(風濤社 昭

四九)

- 一一、日本子どもの本研究会『子どもの成長と読書』(岩崎書店 昭四七)
- 日本子どもの本研究会『子どもの本の学校』(講談社 昭四五)
- 日本子どもの本研究会『あたらしい子どもの本の発見』(金の星社 昭四五)
- 一二、日本子どもの本研究会『子どもの本棚』一一号(明治図書 昭四九) 上岡功、汲木井やよい、山花郁子
- 一三、日本子どもの本研究会『子どもの本棚』一四号(明治図書 昭五〇) 板倉加代子、長崎源之助、西本鶏介
- 一四、子どもの本研究会「私たちの選んだ子どもの本」(東京子ども図書館 昭四九)
- 一五、日本子どもを守る会『第八回 子どもに読ませたい一〇〇冊の本』(草土文化 昭四九)
- 一六、大阪市立図書館子どもの本棚委員会「こどものほんだな」(昭四八、四九、五〇)
- 一七、大阪市立中央図書館児童図書選定委員会「選定児童図書目録」(昭四四、四五、四六)
- 一八、大阪府立図書館「こどものための一〇〇冊の本」(昭四八)
- 一九、広島市児童図書館よい本をすすめる母の会「七二子どもの心を育てる良書目録」(昭四七)
- 二〇、名古屋市鶴舞中央図書館児童図書選定協議会「児童図書目録」一二集、一九集(昭四三、五〇)
- 二一、神奈川県立図書館「小学生のための二〇〇冊の本」(昭四六)
- 二二、墨田区立緑・寺島・あずま図書館「子どもにすすめる二〇〇冊の本 幼児から中学生まで」
- 二三、大阪市立児童文化会館「母と子の読書」選定委員会「母と子の読書のための一〇〇冊の本」

二四、全国学校図書館協議会「第三訂 必読図書目録 何をどう読ませるか」

(昭四四)

二五、児童図書館研究会「えほんのもくろく」(日本図書館協会 昭四九)

なお、第二次使用リストにおいて、同一人および同一機関がそれぞれ異なる出版物数冊で示したリストは、筆者の裁断で適宜統合し、重複を避けている。使用リスト中同番号でくくられたものがそれである。

「第三次」統計リストは更に七年後の昭和五七年(一九八二)、前回以後発表のリストで集計し、これ迄のものを併せて計算、たとえば、兵庫県教育委員会幼児教育センタ発行『子育て』に発表したものである。この特徴は前記二回のを合計したことであるが、本稿ではあらためて第三次分だけを取り出し、上位一一推薦以上をもって掲載した。使用リストは次の通りである。

### 第三次 — (資料リスト)

- 一、嶋路和夫『親が子どもを本嫌いにする』(PHP 昭五一)
- 二、阪本一郎『絵本の研究』(日本文化科学社 昭五二)
- 三、渋谷清規『子どもの本と読書を考える』(鳩の森書房 昭五三)
- 四、木下逸枝『乳幼児の成長発達と絵本 ○才から三才を迎えるまで』(高文堂出版 昭五四)
- 五、増村王子他『手づくりの絵本』(草土文化 昭五五)
- 六、鈴木祥蔵『絵本でひろがる世界』(解放出版社 昭五五)
- 七、今江祥智編『絵本・子ども・大人』(理論社 昭五六) 二二名の「わたしのブックリスト五〇」
- 八、聖母女学院短期大学「児童文学一九七七」(昭五二)「同一九八二」(昭

五七)

九、「月刊絵本」一二月臨時増刊号「絵本の本棚」(すばる書房 昭五一)

一〇、日本児童文学別冊「改訂 日本の絵本一〇〇選」(偕成社 昭五六)

一一、日本児童文学別冊「改訂 世界の絵本一〇〇選」(偕成社 昭五六)

一二、木馬館「ぼこモコ六丁目がえらんだ一〇三プラス一六さつ絵本」(昭五四)

一三、日本子どもの本研究会絵本研究部「えほん 子どものための三〇〇冊」

(草土文化 昭五六)

一四、日本子どもの本研究会『子どもの本と読書の事典』(岩崎書店 昭五八)

一五、公文研究会「公文すいせん図書一覧表」(プリント 昭五六)

一六、大阪市立中央図書館子どもの本棚委員会「子どものほんだな」(昭五六)

一七、茨木市立図書館「子どもの読書のために 第八集」(昭五六)

一八、全国学校図書館協議会「よい絵本」第一回〜五回(昭五二〜五六)

なお、七については二二名の個別リストを含んでおり、全体の推薦数を大きくする理由となっている。

ところで、第一次リストの作成を昭和四三年に行ない始めた理由は、当時絵本出版に見るべきものと判断されたからであり、時代的背景による。ちなみに戦後わが国の児童文学の動きを、主に幼年文学ないしは絵本に焦点を当てて概括すると、表三のような年表になる。



表3 児童文学関係略年表

(筆者作製)

(西 暦)	年	絵本をめぐる	児童文学をめぐる	社会の動き
(1950)	昭和24	・至光社月刊絵本「こどものせかい」発行	・「学校図書館協議会」発足	・「児童憲章」制定 ・文部省第1回児童文化会議  ・テレビ放送開始、マンガ攻勢
	25	・岩波「図書」で「少年少女読物百種委員会選定目録」		
	26			
	27			
(1955)	28	・岩波書店「子どもの本」発行 ・「少年文学宣言」	・「民話の会」「日本子どもを守る会」結成 ・「日本児童図書出版協会」発足 ・「学校図書館法」成立	・「児童憲章」制定 ・文部省第1回児童文化会議  ・テレビ放送開始、マンガ攻勢   ・文部省学力調査実施 ・「道徳」特設
	29	・ゴースキー「児童文学と教育」訳		
	30	・雑誌「日本児童文学」第3次 ・マカレンコ「児童文学と児童読物」訳	・アンデルセン生誕150年記念行事 ・「日本児童文芸家協会」結成	
	31	・福音館書店、月刊絵本「こどものとも」発行	・「文学教育の会（後日本文学教育連盟）」結成 ・「必読図書」制度開始 ・「家庭文庫研究会」組織	
	32	・ポール・アザール「本・子ども・大人」訳		
	33	・全国学校図書会協会「何をどう読ませるか」全5巻	・「子どもを守る文化会議」実行委員会、児童図書選定制度に対する反対声明 ・親子読書運動・児童図書館運動活発	
34	・ヒューリマン「子どもの本の世界」訳 ・古田足日「さよなら未明」発表			
(1960)	35	・石井桃子他「子どもと文学」出版	・全国学校図書館協議会「課題図書」制度  ・読書感想文コンクール開始	・少年週刊誌盛行 ・文部省児童図書選定制度 ・国連「児童の権利宣言」  ・カラーテレビ本放送開始   ・阿部進「現代子ども気質」 ・テレビ受像機1000万台を超える ・ベビー・ブーム ・「鉄腕アトム」高視聴率 ・戦争マンガ全盛 ・東京オリンピック開催
	35	・棕鳩十、母と子の20分間読書運動提唱		
	36	・福音館書店「世界傑作絵本」発行		
	37	・至光社月刊絵本本格化 ・松谷みよ子 国際アンデルセン賞受賞「龍の子太郎」		
	38	・第1回NHK児童文学賞・中川李枝子「いよいよえん」		
(1965)	39	・L・H・スミス「児童文学論」訳	・日本近代文学館分館として児童文庫開館 ・「日本親子読書センター」発足 ・日本児童文学者協会主催「幼児教育と幼年文学講座」開始	
	40	・石井桃子「子ども図書館」出版 ・丸善「学燈」特集世界の絵本研究		
	41	・絵本出版683点		
	42	・「日本児童文学」ブックリスト特集 ・ポプラ社「むかしむかし絵本」全30巻刊行開始 ・瀬川康男世界絵本原画展グランプリ		

第1次 リスト	43	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本児童文学」特集・絵本 絵本出版 953 点</li> <li>・田島征三世界絵本原画展受賞</li> <li>・「子どもの本の事典」出版</li> <li>・ヒューリマン「子どもの本の世界」訳</li> <li>・チャコフスキー「2歳から5歳まで」訳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本子どもの本研究会」結成</li> <li>・日本読書学会「人間形成の標準読み物目録」</li> <li>・「子どもの文化研究所」創立</li> <li>・国際アンソルセン賞審査委員に日本代表神宮輝夫派遣</li> <li>・「親子読書、地域文庫全国協議会」発足</li> <li>・子どもの本専門店出現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学紛争</li> <li>・公害問題</li> </ul>
(1970)	45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本児童文学 臨時増刊 絵本」発行</li> <li>・丸木夫妻世界絵本原画展受賞</li> <li>・「児童文学1972」発行</li> <li>・「月刊絵本」創刊 ・「絵本の世界」創刊</li> <li>・松岡享子他「東京子ども図書館」発足</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪 EXPO、GNP 世界2位</li> </ul>
第2次 リスト (1975)	46	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読売新聞「絵本にっぽん賞」制定</li> <li>・「月刊絵本」廃刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部・厚生両省後援「絵本週間」開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石油ショック</li> <li>・国際児童年</li> </ul>
(1980)	47	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤羽末吉国際アンソルセン賞受賞</li> <li>・「月刊絵本」季刊として復刊</li> <li>・「季刊児童文学批評」「飛ぶ教室」発行</li> <li>・「日本児童文学」別冊「日本の絵本100選」「世界の絵本100選」</li> <li>・「児童文学アニュアル1972」発行</li> <li>・「子どもの本と読書の事典」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公共図書館の児童図書室 953 72%に及ぶ</li> <li>・児童書新刊2185点 ・全国に家庭文庫 4406、</li> <li>・全国子どもの本専門店会結成</li> <li>・子どもの本専門店の閉鎖多し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書批判始まる</li> <li>・国際障害者年</li> </ul>
第3次 リスト	56			<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際コミュニケーション年</li> </ul>
	57			
	58			

これを見ると、明らかに四二年から四四年にかけて、児童文学界に社会的・歴史的に目立った状況が展開したことが判る。四〇年の石井桃子の『子どもの図書館』は岩波新書という出版媒体によって広く児童書への関心を誘うものであった。また、四四年の『子どもの本の事典』の刊行は、四三年時点での児童文学界の動きを象徴する。一方、これ

らに先立つ三四年の古田の「さよなら未明」、三五年の石井桃子ら六人による『子どもと文学』、椋鳩十による「母と子の二〇分間読書運動」、三六年の福音館書店の「世界傑作絵本」が、二八年に始まった岩波書店「子どもの本」の発行および三一年の福音館書店による月刊絵本「こどものとも」の発行に導かれた動向として留意され、次いで

前述の四二年の興隆に影響したものと捉えられよう。古田は四二年を「日本の絵本の世界に変化が起り始めた年であった<sup>(33)</sup>」と言う。いう迄もなく、この絵本ブームの動向に当時の日本経済の興隆、したがって進学率の向上、文化への関心の増大が大きく影響した。また、少女週刊誌の盛行やカラーテレビ放送の開始、テレビ台数の急増などによるいわゆる「現代っ子気質」(阿部進)への懸念が親達の警戒心を喚起し、文部省の教育政策と関連して幼児教育の重要性を注目させ始めたのであった。これらにしたがって、第一次資料リストに見る通り、良書リストが三〇年代末期から急速に提出され始めたのである。そして既に明らかな通り、この動向はほぼ七年のサイクルを描いている。二八年の岩波子どもの本を象徴とする「民話の会」(二七年)や「日本子どもを守る会」(二七年)の結成、日本児童図書出版協会の創立(二八年)、三五年の『子どもと文学』の発行と親子読書運動、

児童図書館運動の活発化、そして四二年から四四年にわたる上記年表記載の状況などがそれを示す。したがって、統計リスト作成の七周年期は筆者が自然に感じとった動向を踏まえたものである一方、一〇年周期では長すぎ、五年では短かすぎるといふ判断、特に一冊の絵本が出版され、読まれ、評価されてリストアップされる年数を七・八年と見た結果である。

ところで、本稿の主要資料をなす表四は前述の三回のリストを総合し、昭和五八年六月一二日の日本保育学会で発表したものである。これには一〇三次それぞれの集計の他、総計を付し、推薦数の多い順に配列してあるが、同数のものについては発行順としており、左端のNoは通し番号にすぎない。たとえば、No六の『かにむかし』は推薦数においては六位から九位の間に位置し、No九の『しろいうさぎとくろいうさぎ』もまた同様である。

表 4 良書リストの統計による総合リスト

No	書名	文	絵	訳	出版社	出版年	1次 (S43)	2次 (S50)	3次 (S57)	計	推せん 数の 動  き	備 考
1	ち い さ い お う	リー・バートン	〃	石 井 桃 子	岩 波	S29	15	19	18	52	A A A	O
2	ぐ り と ぐ ん	中 川 孝枝子	大 村 百合子	福 音 館	38	13	15	15	20	48	A A A	O
3	か ば く ん	岸 田 杢 子	村 谷 千代子	福 福	37	13	15	19	19	47	A A A	O
4	て ぶ く ろ	ウクライナ民話	中 谷 ナ ョ フ	内 田 莉沙子	福 福	43	8	12	27	47	C A A	O
5	いたずらきかんしやちゅうちゅう	リー・バートン	〃	村 岡 花 子	福 福	36	15	15	16	46	A A A	O

※ O 「子どもの好きな本のリスト」(別冊)にあるもの  
B 1981年 ベスト・セラー 150冊 (日本書籍販売連合会調べ) 中にあるもの } 『児童文学アニュアル1982』(備成社)  
L 1981年 ロング・セラー 750冊 (同上) 中にあるもの

6	かにむかし	木下順二	清水 昆		岩波	34	16	18	9	43	A	A	C	O	
7	どろんこハリー	ジョーン	グレーム	渡辺 茂男	福	39	14	14	15	43	A	A	A	O	L
8	三びきのやぎのらがらどん	北 欧 民 話	M・ブラウン	瀬田 貞二	福	40	10	14	19	43	B	A	A	O	B L
9	しろいうさぎとくろいうさぎ	G・ウィリアムズ	"	松岡 享子	福	40	9	14	20	43	C	A	A	O	B L
10	おおきなかぶ	ロシア民話	佐藤 忠良	内田 莉沙子	福	37	12	15	15	42	A	A	A	O	B L
11	ふしぎなたけのこ	松野 正子	瀬川 康男		福	38	14	15	13	42	A	A	B	O	L
12	もりのなか	M・H・エッツ	"	まさき るりこ	福	38	10	11	20	41	B	B	A	O	
13	はなをくんくん	ルース・クラウス	M・サイモント	木 島 始	福	42	6	12	23	41	D	A	A		L
14	きかんしゃやえもん	阿川 弘之	岡部 冬彦		岩波	39	15	16	9	40	A	A	C	O	
15	はなのすきなうし	M・ルーフ	R・ローソン	光 吉 夏 弥	岩波	29	13	13	11	37	A	A	B		
16	こどもがはじめてであう絵本	D・ブルーナ	"	石井 桃子	福	39	13	14	10	37	A	A	C	O	B L
17	ひとまねこざる	H・A・レイ	"	光 吉 夏 弥	岩波	29	12	15	9	36	A	A	C	O	
18	あおくんときいろちゃん	レオ・レオーニ	"	藤田 圭雄	至光社	42	2	8	26	36	E	C	A		
19	しょうぼうじどうしゃじぶた	渡辺 茂男	山本 忠敬		福	38	10	14	11	35	B	A	B	O	B L
20	チムとゆうかなせんちょうさん	アンディゾーニ	"	瀬田 貞二	福	38	13	13	8	34	A	A	C		
21	ねむりひめ	グリム	ホフマン	瀬田 貞二	福	38	11	12	11	34	B	A	B		
22	おかあさんだいすき	M・ブラック	"	光 吉 夏 弥	岩波	29	13	13	6	32	A	A	D		
23	やまんばのにしき	松谷 みよ子	瀬川 康男		ポプラ社	44	6	14	12	32	D	A	B		L
24	こねこのびっち	H・フィッシャー	"	石井 桃子	岩波	29	13	12	6	31	A	A	D		
25	いやいやえん	中川 李枝子	大村 百合子		福	37	14	14	3	31	A	A	E	O	B
26	しずかなおはなし	S・マルシャーク	レーベデフ	内田 莉沙子	福	38	14	10	7	31	A	B	D		
27	スーホの白い馬	モンゴル民話	赤羽 末吉	大塚 勇三	福	42	5	10	16	31	D	B	A	O	L
28	かもさんおとお	マックロスキー	"	渡辺 茂男	福	40	8	14	8	30	C	A	C	以 上	I
29	ももたろう	松居 直	赤羽 末吉		福	40	11	9	9	29	B	B	C		
30	かさじぞう	瀬田 貞二	赤羽 末吉		福	41	6	9	14	29	D	B	B	O	
31	あおい目のこねこ	エゴン・マチーセン	"	瀬田 貞二	福	40	11	10	7	28	B	B	D		
32	ちからたろう	今井 祥智	田島 征三		ポプラ社	43	2	11	15	28	E	B	A	O	L
33	おやすみなさいのほん	ブラウン	シャロー	石井 桃子	福	37	11	9	7	27	B	B	D		
34	だいくとおにろく	松居 直	赤羽 末吉		福	37	10	10	6	26	B	B	D	O	
35	いたずらこねこ	バーディン・クック	チャーリップ	まさき るりこ	福	39	8	9	9	26	C	B	C		
36	だるまちゃんとてんぐちゃん	加古 里子	"		福	42	5	10	11	26	D	B	B	O	L

37	ちびくろさんぼ	H・バンナーマン	F・トビアヌ	光吉夏弥	岩波	28	11	10	4	25	B B E	O	
38	おしゃべりなたまごやき	寺村輝夫	長新太		福	34	3	8	14	25	E C B	B L	
39	三びきのこぶた	イギリス民話	山田三郎	瀬田貞二	福	47	4	12	9	25	D A C	O	L
40	ねずみくんのチョッキ	なかえよしお	上野紀子		ポプラ社	42	—	3	22	25	F E A	B L	
41	たろうのおでかけ	村山桂子	堀内誠一		福	49	9	9	6	24	C B D	O	L
42	ちいさなねこ	石井桃子	横内 襄		福	38	11	8	5	24	B C D		
43	ブレーメンのおんがくたい	グ リ ム	H・フィッシャー	瀬田貞二	福	39	6	10	8	24	B B C	B L	
44	おやすみなさいフランシス	R・ホーバン	ウイリアム	松岡享子	福	41	6	10	8	24	D B C		
45	わたしとあそんで	M・エッツ	〃	与田準一	福	43	—	9	15	24	F B A	O	
46	おおきなおおきなおいも	赤羽末吉	〃		福	47	—	5	19	24	F D A	O	L
47	まりーちゃんとひつじ	フランソワーズ	〃	与田準一	岩波	31	10	9	4	23	B B E		
48	100まんびきのねこ	ワンダ・カアグ	〃	石井桃子	福	36	10	7	6	23	B C D		
49	おおかみと七ひきのこやぎ	グ リ ム	ホフマン	瀬田貞二	福	42	4	10	9	23	D B C		
50	すてきな三にんぐみ	トミー・アンゲラー	〃	今江祥智	偕成社	44	—	5	18	23	F D A	O	
51	モチモチの木	斎藤隆介	滝平二郎		岩崎書店	46	—	7	16	23	F C A	O	
52	ふしぎなたいこ	岩波編集部	〃		岩波	29	10	8	4	22	B C E	O	
53	かわ	加古里子	〃		福	37	7	6	9	22	C D C		L
54	マーシャとくま	ロシア民話	ラチョフ	内田莉沙子	福	38	11	9	2	22	B B E		
55	ごきげんなライオン	ルヘーズ・ファティオ	デュボアザン	村岡花子	福	39	7	9	6	22	C B D		
56	たんじょうび	H・フィッシャー	〃	大塚勇三	福	40	5	8	9	22	D C C		
57	ろくべえまってるよ	灰谷健次郎	長新太		文研出版	50	—	—	22	22	F F A	以上 II	
58	ももいろのきりん	中川李枝子	中川宗弥		福	40	8	11	2	21	C B E		
59	ゆきのひ	J・キーツ	〃	木島 始	偕成社	44	—	11	10	21	F B C		
60	わたしのワンピース	にしきまかやこ	〃		こぐま社	44	—	8	13	21	F C B	O	
61	どろんどこぶた	A・ロベール	〃	岸田 衿子	文化出版局	46	—	5	16	21	F D A	O	L
62	ききみみずきん	木下順二	初山 滋		岩波	31	8	8	4	20	C C E		
63	11びきのねこ	馬場のぼる	〃		こぐま社	42	1	8	11	20	E C B	O	
64	ふたりはともだち	A・ロベール	〃	三木 卓	文化出版局	47	—	4	16	20	F E A		
65	どうぶつのこどもたち	マルシャーク	レーベデフ	石井桃子	岩波	29	11	6	2	19	B D E		
66	とらっくとらっくとらっく	渡辺茂男	山本忠敬		福	36	10	5	4	19	B D E	O	
67	あふりかのたいこ	瀬田貞二	寺島 竜一		福	37	10	7	2	19	B C E		

68	ち い さ い も も ち ゃ ん	松 谷 みよ子	菊 池 貞 雄		講談社	39	5	10	4	19	D B E	O	L
69	かいじゅうたちのいるところ	M・センダック	"	神 宮 輝 夫	富山房	50	—	—	19	19	F F A		
70	海のおばけオーリー	エ ッ ツ	"	石 井 桃 子	岩 波	29	7	5	6	18	C D D		
71	ス イ ミ ー	レオ・レオーニ	"	谷 川 俊太郎	好学社	44	—	6	12	18	F D B		
72	フ レ デ リ ッ ク	レオ・レオーニ	"	谷 川 俊太郎	好学社	44	—	4	14	18	F E B		
73	はたらきもののじょせつしゃけいてい	バ ー ト ン	"	石 井 桃 子	福	37	7	7	3	17	C C E		
74	そ ら い ろ の た ね	中 川 李枝子	大 村 百合子		福	39	9	5	3	17	C D E	O	L
75	大 雪	ゼリーナ・ヘンツ	"	生 野 幸 吉	岩 波	40	5	5	7	17	D D D		
76	ラ チ と ら い お ん	M・ベロニカ	"	徳 永 康 元	福	40	5	7	5	17	D C D		
77	うんがにおちたうし	F・ラクシロスキー	P・アパイアー	みなみもとちか	ポプラ社	42	3	10	4	17	E B E	O	
78	おばあさんのひこうき	佐 藤 さとる	"		小峰書店	42	4	12	1	17	D A E		L
79	王さまと九人のきょうだい	中国イ族昔話	赤 羽 末 吉	君 島 久 子	岩 波	44	—	10	7	17	F B D	O	
80	ごろはちだいみょうじん	中 川 正 文	梶 山 利 夫		福	44	—	6	11	17	F D B		
81	は け た よ は け た よ	神 沢 利 子	西 巻 かよこ		偕成社	45	—	6	11	17	F D B	O B L	
82	ピーター・ラビットのおはなし	V・ポッター	"	石 井 桃 子	福	46	—	5	12	17	F D B	O	
83	おばけのバーバパパ	チ ェ ヅ ー	"	山 下 はるなお	偕成社	47	—	6	11	17	F D B	O B L	
84	おいしいのぼうけん	古 田 足 日	たばたせいいち		童心社	49	—	1	16	17	F E A	O B L	
85	はせがわくんきらいや	長谷川 集 平	"		すばる書房	52	—	—	17	17	F F A	以 上 III	
86	ゆ か い な か え る	J・キープス	"	石 井 桃 子	福	39	8	5	3	16	C D E		
87	どうぶつのおやこ	藪 内 正 幸	"		福	41	2	6	8	16	E D C		
88	い な い い な い ば あ	松 谷 みよ子	瀬 川 康 男		童心社	42	4	8	4	16	D C E	O B L	
89	ハ ー タ ー の い す	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎		福	42	2	5	9	16	E D C		
90	ピ ー タ ー の い す	E・J・キーツ	"	木 島 始	偕成社	44	—	6	10	16	F D C		
91	ふ き ま ん お く	田 島 征 三	"		偕成社	48	—	2	14	16	F E B		
92	よ あ け	V・シュルヴィッツ	"	瀬 田 貞 二	福	52	—	—	16	16	F F A		
93	三 び き の く ま	トルストイ	バズネツォフ	おかざわらとよき	福	37	2	10	3	15	E B E	O	
94	ほしになったりゅうのきば	君 島 久 子	赤 羽 末 吉		福	38	6	7	2	15	D C E		
95	の ろ ま な ロ ー ラ ー	小 出 正 吾	山 本 忠 敬		福	40	7	4	4	15	C E E	O	
96	ふ る や の も り	瀬 田 貞 二	田 島 征 三		福	40	3	4	8	15	E E C		
97	い っ す ん ぼ う し	大 川 悦 生	えんどうてるよ		ポプラ社	42	3	7	5	15	E C D	O	
98	お に た の ぼ う し	あまん きみこ	岩 崎 ちひろ		ポプラ社	44	—	9	6	15	F B D		L

99	あ は が は	ヤシマ タロウ	〃		福	38	6	6	2	14	D	D	E	
100	エルマーのぼうけん	R・S・ガネット	R・C・ガネット	渡 辺 茂 男	福	38	3	8	3	14	E	C	E	O B L
101	おだんごぱん	ロシア民話	脇 田 和	瀬 田 貞 二	福	41	0	6	8	14	E	D	C	
102	しずくのぼうけん	テルリコフスカ	ブ テ ン コ	内 田 莉沙子	福	44	—	7	7	14	F	C	D	O
103	かたあしだちょうのエルフ	おのきがく	〃		ポプラ社	45	—	7	7	14	F	C	D	L
104	しばてん	田 島 征 三	〃		偕成社	46	—	1	13	14	F	E	B	
105	ばちばちいこか	M・セイラー	R・グロスマン	今 江 祥 智	偕成社	55	—	—	14	14	F	F	B	
106	アンディとライオン	ドハーティー	〃	村 岡 花 子	福	36	7	5	1	13	C	D	E	
107	いっすんぼうし	石 井 桃 子	あきの ふ く		福	40	6	6	1	13	D	D	E	
108	じどうしゃ	寺 島 竜 一	〃		福	41	0	8	5	13	E	C	D	
109	きつねとねずみ	ビアノンキ	山 田 三 郎	内 田 莉沙子	福	42	4	8	1	13	D	C	E	
110	おばけリンゴ	ヤノーシュ	〃	やがわ すみこ	福	44	—	6	7	13	F	D	D	
111	ぐるんぱのようちえん	西 内 ミナミ	堀 内 誠 一		福	45	—	6	7	13	F	D	D	O L
112	とこちゃんはどこ	松 岡 享 子	加 古 里 子		福	45	—	7	6	13	F	C	D	O L
113	おおきな木がほしい	さとう さとる	むらかみつとむ		偕成社	46	—	8	5	13	F	C	D	O 以上Ⅳ
114	花さき山	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎		岩崎書店	44	—	8	4	12	F	C	E	O B L
115	なつのあさ	谷 内 こうた	〃		至光社	45	—	3	9	12	F	E	C	
116	げんきなマドレーヌ	R・ペーメルマン	〃	瀬 田 貞 二	福	47	—	5	7	12	F	D	D	O
117	まっくろネリノ	ヘルガ・ガルラー	〃	やがわ すみこ	偕成社	48	—	5	7	12	F	D	D	
118	へびのクリクター	T・ウンゲラー	〃	中 野 完 二	文化出版局	49	—	4	8	12	F	E	C	L
119	おじさんのかさ	さのようこ	〃		銀河社	49	—	0	12	12	F	E	B	
120	ぞうのボタン	うえの のりこ	〃		富山房	50	—	—	12	12	F	F	B	
121	どこからきたの	与 田 準 一	や す た い		童心社	41	3	4	4	11	E	E	E	
122	もぐらとずぼん	E・ベチシカ	ミ レ ル	内 田 莉沙子	福	42	1	7	3	11	E	C	E	O
123	じめんのうえとじめんのした	A・E・ウェバー	〃	藤 枝 滯 子	福	43	—	5	6	11	F	D	D	
124	ふしぎなえ	安 野 光 雅	〃		福	43	—	2	9	11	F	E	C	
125	あのこ	今 江 祥 智	宇 野 亜喜良		理論社	45	—	0	11	11	F	E	B	
126	またもりへ	M・H・エッツ	〃	間 崎 ルリ子	福	45	—	6	5	11	F	D	D	
127	ティッチ	P・ハッチンス	〃	石 井 桃 子	福	50	—	—	11	11	F	F	B	
128	ロージーのおさんぽ	P・ハッチンス	〃	渡 辺 茂 男	偕成社	50	—	—	11	11	F	F	B	
129	はらべこあおむし	E・カール	〃	森 比左志	偕成社	51	—	—	11	11	F	F	B	

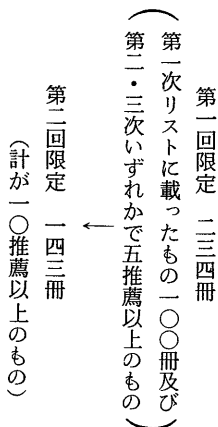
130	シナの五人きょうだい	ビショップ・ヤング	ゼー	石内	子	福	36	9	1	0	10	C	E	E	
131	ありのようふくや	バング・ヤング	チヨフ	井田	桃	福	37	6	4	0	10	D	E	E	
132	びりっかすのてねこ	M・ディヤング	”	中村	妙子	福	42	3	6	1	10	E	D	E	
133	おおきくなりすぎたくま	リン・ワード	”	渡辺	男	福	44	—	7	3	10	F	C	E	
134	くまのこウー	神沢利子	井上洋介	川	茂	ボアラ社	44	—	6	4	10	F	D	E	
135	ねこねこねこ	G・H・ザル	榎山俊夫	前	男	福	44	—	6	4	10	F	D	E	
136	いちにちにへんとおるバス	中川正文	榎山俊夫	川	男	福	47	—	3	7	10	F	E	D	
137	こ と ば あ そ び う た	谷川俊太郎	瀬川康男	—	—	福	48	—	1	9	10	F	E	C	
138	ピーターのくちぶえ	J・キーツ	”	—	—	福	49	—	3	7	10	F	E	D	L
139	ラ・タ・タ・タム	ベーター・ニクル	B・ジュ・ダー	木矢	始子	福	50	—	1	9	10	F	E	C	
140	あいいうえおの本	安野光雅	”	島	澄子	福	51	—	—	10	10	F	F	C	B
141	わ た し	谷川俊太郎	長小野木	—	—	福	51	—	—	10	10	F	F	C	
142	おんどりと2まいのきんか	安藤美紀夫	新太学	—	—	福	52	—	7	3	10	F	C	E	
143	はるに	安藤美紀夫	小野木(写真)	—	—	福	56	—	—	10	10	F	F	C	
付	あめのひのおるすばん	安藤美紀夫	岩崎ひろ	—	—	至光社	43	1	1	7	9	E	E	D	以上 V

なお、直接統計対象にした絵本の点数は、次の通りである。

— 表五 —

統計対象となった絵本の冊数

第一次（推薦二以上）	一七五冊
第二次（推薦三以上）	二三七冊
第三次（とりあげられた全て）	一〇六一冊
	計一四七三冊



このうち、第一次統計リストにとりあげられた一〇〇冊中の一〇冊は推薦数二の中のものであるが、特に強い推薦の意図が同われたものを抜き出して組み入れたものである。なお、総合リストの推薦数九という次点該当絵本は他にも数多いが、ここでは一例として『あめのひのおるすばん』を付記した。総合リスト中には、いわゆる知識絵本ないしは生活絵本に分類すべきものや、絵本というより童話というべきものも含まれているが、資料リストの推薦に或程度の判断を加えたほかは、できるだけ個々の作成者の分類を尊重した。これは前述したように、リスト一般に見られる欠点であり、本リストにおいても同様の欠点を持つことになる。しかし、このことは、反復になるが、「絵本とは何か」についての概念が定まっていなかったことをも意味しており、リスト作成上



不可避の限界でもある。しかし、とりあげた全冊数の多いことでそれは許容されるだろう。<sup>(34)</sup>

なお、推薦動向の把握方法として、各統計リストおよび総合リストそれぞれにおいて、ほぼ同数の五分割を行なった。その結果は表六の通りであり、第三次迄の各段階それぞれにA、B、C、D、Eの記号を付した。ただし、総合リストについては混同を避けてI、II、III、IV、Vを当ててある。ここに見られる冊数のバラつきは推薦同数の場合の端数であり、筆者の判断で区切りをつけている。Fは当該調査時に未発行だったものである。なお留意すべきは、D・E記号のものが質的に甚しく低いのでは全くなく、リストアップされなかった二〇〇点余りがなお下に続くことである。つまり、A↘E記号は一応評価水準を示すにしても、選ばれた多推薦書一四三冊中の位置を示すものであり、評価動向把握の手段にすぎない。たとえば、No.一の『ちいさいうち』はAAAという動きをもち、三回のリストで上位五分の一段階に入っていたことを示す。これに対して、No.六の『かにむかし』はAACと、第三次が中間五分の一水準に位置し、No.四〇の『ねずみくんのチョッキ』はFEAと第一次統計時の未発行から第三次で急速に上位五分の一に達したことを意味する。なお、備考欄の記号、Oじるし、およびB、Lについては後述する。

ところで、本総合リストに考察しうる若干の意義ないしは有用性を述べておきたい。

(一)まず、このリストは、相当信頼度の高い良書リストとして一般に使用しうるものである。特に一〇〇冊迄とか上記Ⅲ段階迄(八五冊)

表6 各年次リスト及び総合リストの段階区分と冊数

リスト 回次	第1次 (昭43)		第2次 (昭50)		第3次 (昭57)		総合リスト		
	推薦 数	実 数 (冊)	推薦 数	実 数	推薦 数	実 数	段階	推薦 数	実 数
A	16 ↘ 12	17	19 ↘ 12	26	27 ↘ 15	26	I	52 ↘ 30	28
B	11 ・ 10	17	11 ↘ 9	27	14 ↘ 11	25	II	29 ↘ 22	29
C	9 ↘ 7	16	8 ・ 7	27	10 ↘ 8	28	III	21 ↘ 17	28
D	6 ↘ 4	20	6 ・ 5	31	7 ↘ 5	29	IV	16 ↘ 13	28
E	3 ↘ 0	17	4 ↘ 0	20	4 ↘ 0	35	V	12 ↘ 10	30
F	未 発 行	56	未 発 行	12	未 発 行	0			
計		143		143		143			143

といった限定を加えると、その信頼性は高まる。いわば子どもにとっての基本図書であり、絵本それ自体の意味に加えて、良書選択の感性を内から育てる素材として、子どもの手近に準備することが望ましいものと言える。

(二)次いで、このリストの経年的変化の中で、クラシックと呼ぶべきものがとり出されうる。元来クラシックとは時間的評価に耐えたものという条件をもつが、本リストに第一次から顔を出している絵本は、三回にわたるふると、ほぼ二〇年の時間的検証を経たものと言え

よう。

たとえば、No.二の『ぐりとぐら』はその出版年から言ってまさにこれに当る。しかも第三次評価に残ったことは、それ以後にわたる評価の継続を予測させるものであろう。そうした古典的価値のあるものは、具体的に言えば、まず三A、つまりA A Aのものである。

No.一の『ちいさいおうち』をはじめ、『ぐりとぐら』『かばくん』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『どろんこハリー』『おきなかぶ』など七冊がそれである。次いで二A、特に後次においてAを重ねたものが加えられる。『てぶくろ』『三びきのやぎのがらがらどん』『しろいうさぎとくろいうさぎ』『はなをくんくん』などがそれである。更に他の二A、つまり、第三次での下降があっても、二度の統計でA段階を占め、下降原因も、後述するように作品自体に要因があったとは言えないものはクラシックとして組み込まれてよいだろう。

『かにむかし』『ふしぎなたけのこ』『きかんしゃやえもん』『はなのすきなうし』『こどもがはじめてであう絵本』『ひとまねこざる』『チムとゆうかなんせんちゃん』『おかあさんだいすき』『こねこのぴっち』『いやいやえん』などがそれである。以上はほぼ確実にクラシックとして捉えてよいものである。なおここで、古典判定の別の基準は本来、内容から来るべきものであることを確認しておきたい。絵本評価の基準が明確に定まれば、「読まれない古典」というものも有りうるのではないか？

その他、準・古典として、統計次を重ねるにつれて上昇しつつあるものを考慮すれば、『もりのなか』『あおくんときいろちゃん』『スー

幼児絵本の評価をめぐる

ホの白い馬』『ちからたろう』があり、更に一度でもA段階にあったものを加えれば、『しょうぼうじどうしゃじぶた』『ねむりひめ』『やまんばのにしき』『しずかなおはなし』『かもさんおとり』『三びきのこぶた』が加わる。これらは二冊を除いてすべて総合段階I以上にあるものであり、二〇〇冊余りから選ばれた三〇冊であることを注目できよう。なお、中には既に世界的古典として評価されているものも含まれている。この他、第一次ないしは第二次まで未発行でありながら第三次で急激に評価され始めたものは将来の古典候補作である。『ねずみくんのチョッキ』『わたしとあそんで』『おきなおきなおき』『すてきな三にんぐみ』『モチモチの木』『ろくべえまっころよ』『どろんここぶた』『ふたりはともだち』『かいじゅうたちのいるところ』『おしいれのぼうけん』『はせがわくんきらいや』『よあけ』などがそれである。ただしこれらのうちには一過性のものもあるかもしれない。言うまでもなく、総合II段階までの他のものも次回七年後のリスト作成で無視できないものになると予測される。

(三)この一覧表を別のアプローチによるリストと対比することによって、相互に意味や問題性が把握される。たとえばその一つとして、「子ども好きな絵本」との相違はどうであるか、という検討が可能であり、この比較は既述の通り、絵本に限らず児童文学そのものの本質にかかわる接近となる。ここでは一応、調査結果(表七)および利用した資料を掲げ、その検討は後に項目を立てて考えてみたい。

(なお、(四)は一二頁に示す。)

表7 子どもの好きな絵本のリスト

No.	書名	文	絵	訳	出版社	出版年	選択数	子ども 対大人	総合リスト			備考
									No.	順位	推薦数	
1	ぐりとぐら				福音館	38	10		2	2	48	
2	ちびくろさんぼ				岩波	28	9	>	37	37	25	
3	三びきのやぎのがらがらどん				福	40	8		8	6	43	
4	11 びきのねこ				こぐま社	42	8	>	63	62	20	
5	しょうぼうじどうしゃじぶた				福	38	8		19	19	35	
6	てぶくろ				福	43	8		4	3	47	
7	おおきなおおきなおいも				福	47	7	>	46	41	24	
8	きかんしゃやえもん				岩波	39	7		14	14	40	
9	しろいうさぎとくろいうさぎ				福	40	7		9	6	43	
10	ちいさいおうち				岩波	38	7		1	1	52	
11	はけたよはけたよ				偕成社	45	7	>	81	73	17	
12	ひとまねこざる				岩波	29	7		17	17	36	
13	あなたのいえわたしのいえ	加古里子	同		福	47	6	×				
14	いたずらきかんしゃちゅうちゅう				福	36	6		5	5	46	
15	おおきなかぶ				福	37	6		10	10	42	
16	かにむかし				岩波	34	6		6	6	43	
17	11 びきのねことあほうどり	馬場のぼる	同		こぐま社	47	6	×				
18	そらいろのたね				福	39	6	>	74	73	17	
19	だるまちゃんとかみなりちゃん	加古里子	同		福	43	6	×				
20	だるまちゃんとてんぐちゃん				福	42	6		36	34	26	
21	どろんこハリー				福	39	6		7	6	43	
22	いやだいやだの絵本	せなけいこ	同		福	44	5	×				
23	おばけのパーパ				偕成社	47	5	>	83	73	11	
24	かばく				福	37	5		3	3	47	
25	くるまはいくつ	渡辺茂男	堀内誠一		福	42	5	×				
26	ぐりとぐらのおきゃくさま	中川李枝子	山脇百合子		福	42	5	×				
27	ぐるんぱのようちえん				福	45	5	>	111	106	13	

28	子どもがはじめてであう絵本				福	39	5		16	15	37	
29	三 び き の こ ぶ た				福	42	5		39	37	25	
30	し ず く の ぼ う け ん				福	44	5	>	102	99	14	
31	しろくまちゃんのほっとけーき	森 比左志 他	わかやま けん		こぐま社	47	5	×				
32	た ろ う の お で か け				福	38	5		41	41	24	
33	ち の は な し	堀 内 誠 一	同		福	53	5	×				
34	と こ ち ゃ ん は ど こ				福	45	5	>	112	106	13	
35	わたしのワンピース				こぐま社	44	5	>	60	58	21	
36	あかちゃんのほんシリーズ				偕 成 社		4	×				
37	か さ じ ぞ う				福	41	4		30	29	29	
38	す て き な 三 に ん ぐ み				偕 成 社	44	4		50	47	23	
39	だ い く と お に ろ く				福	37	4		34	34	26	
40	ち い さ い モ モ ち ゃ ん				講 談 社	39	4	>	68	65	19	
41	ち か ら た ろ う				ポプラ社	43	4		32	31	28	
42	とらっくとらっくとらっく				福	36	4	>	66	65	19	
43	ど ろ ん こ こ ぶ た				文化出版	46	4		61	58	21	
44	の ろ ま な ロ ー ラ ー				福	40	4	>	95	93	15	
45	はじめてのおるすばん	しみず みちを	山 本 まつ子		岩崎書店	47		×				
46	ピーターラビットのおはなし				福	45	4	>	82	73	17	
47	も ぐ ら と じ ど う し ゃ	ペ チ シ カ	ミ レ ル	うちだ りさこ	福	44	4	×				
48	も ぐ ら と ず ぼ ん				福	42	4	>	122	121	11	
49	モ チ モ チ の 木				岩崎書店	46	4		51	47	23	
50	い や い や え ん				福	37	3	<	25	24	31	
51	い な い い な い ば あ				童 心 社	42	3	>	88	86	16	
52	い っ す ん ぼ う し	大 川 悦 生	遠 藤 てるよ		ポプラ社	42	3	>	97	93	15	
53	う ん が に お ち た う し				ポプラ社	42	3		77	73	17	
54	エ ル マ ー の ぼ う け ん				福	38	3	>	100	99	14	
55	お しいれのぼうけん				童 心 社	49	3		84	73	17	
56	王さまと九人のきょうだい				岩 波	44	3		79	73	17	
57	お お き な 木 が ほ し い				偕 成 社	46	3	>	113	106	13	
58	げ ん き な マ ド レ ー ス				福	47	3	>	116	114	12	

59	こぐまちゃんありがとう	わかやま けん	同		こぐま社	47	3	×	93	93	15	
60	三びきのくま				福 波	37	3	＞				
61	じてんしゃにのびとまねこざる	H・A・レイ	同	光 吉 夏 弥 子	福 波	29	3	×	27	24	31	
62	スーホの白い馬				福 波	42	3	＜				
63	ぞうのババール	アリュノフ	同	矢 川 澄 子	評論社	49	3	×				
64	ちいさなゆうびんひこうき	デイズニー	同		富山房	53	3	×				
65	チキチキバンバン	フレミング	同		成 社	55	3	×				
66	ないたあかお	浜 田 広 介	池 田 竜 雄		成 社	40	3	×				
67	花 さ き				岩崎書店	44	3	＞	114	114	12	
68	ひとまねこざるびょういんへいく	H・A・レイ	同	光 吉 夏 弥	岩 波	43	3	×				
69	ふ し き な た い て				岩 波	29	3		52	52	22	
70	ふ し き な た の て				福 成 社	38	3	＜	11	10	42	
71	も り の な か		同		福 成 社	38	3	＜	12	12	41	
72	わっしょいわっしょいぶんぶん					48	3	×				
73	わたしとあそんで	か こ さ と し	同		福 成 社	43	3		45	41	24	

註) 1. 「文」「絵」「記」欄については総合リストを参照のこと。ここでは総合リストに掲載されていないもののみ明示してある。

2. 「子ども対大人」欄の記号は次の意味をもつ。「子どもの好きな本のリスト」対「良書リスト」の統計による総合リスト)

空欄 子ども対大人の評価に大きな差が認められないもの

× 大人の評価(「良書リスト」の統計による総合リスト)では10推薦をえてないもの

＞ 子どもの評価の方が大人の評価より著しく高いと考えられるもの

＜ 大人の評価の方が子どもの評価より著しく高いと考えられるもの

「子どもの好きな絵本のリスト」作成に使用した文献・資料

(一)『母の友』昭五一・六「子どもが選んだ一〇冊の絵本」(全国一〇幼稚園による回答)

(二)山本道子調査 昭五一 「子どもと絵本の世界―基本的欲求を中心に―(参考資料)」(保母・教諭回答)

(三)中村悦子・佐々木宏子『集団保育と絵本』(高文堂出版)「子どもが喜んだ絵本」

四岩崎京子他『児童文学創作講座四』「何をどう読むか」(東京書籍)昭五六(岩崎京子報告)

(四)奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会編『絵本との出会い 三・四・五歳児の指導』昭五一 (瀬度一〇回以上)

(六)日本こどもの本研究会編『子どもの本棚』一四号、七五「特集子どもの本の選び方」町田紀久子「子どもたちによく読まれている本」

(七)日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』一、二、七、四「特集絵本の世界」上岡功、波木井やよい、山花郁子「子どもに印象深かった本(親子読書会テキスト)」

(八)同誌「家庭文庫や地域文庫で子どもに人気のある本」

(九)日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』一七号、七六「特集子どもが喜ぶ

本」鳥越信司会座談会「子どもの喜ぶ本について」  
 (付)『日本児童文学』臨時増刊『絵本』昭四六、福島礼子「実践記録・しおかぜ号  
 と子どもと絵本」(江東図書館八年間の記録)

(以上二〇冊)

なお、このリストは総合リストに比して資料的価値がなお十分ではない。なぜなら、参考リスト数が前記のように少ない上、それぞれの内容がもつ質も大人の判断や発言を主体としている以上、必ずしも子どもそのものの声の反映であるかどうか確言できないからである。また、子どもが対象とした本の範囲は、既に大人が選択した後のもの、あるいは大人が行なった読み聞かせ活動の影響を受けたものという限界があるからである。しかし、翻って考えれば、子どもの全くの恣意に基づく選択資料は作成不可能である。その意味で、上記総合リストに基づき、そこに掲げられた絵本がどのように子どもに受け入れられているか、逆はどうかを検討することは次善の方法であろう。総合リスト「備考」欄の〇じるしのもが「子どもの好きな絵本のリスト」と重なっているものである。

同様に、ベストセラーやロング・セラーとの対比ができる。たとえば、『児童文学アニュアル一九八二』<sup>(35)</sup>に掲載の一九八一年度ベストセラー本およびロングセラー本との比較を試みてみよう。掲載されたベストセラー絵本六一冊中、総合リストに含まれるものは一九冊三一・一％であり、ロングセラー絵本二四一冊中三九冊一六・二％である。それらベストセラー絵本およびロングセラー絵本は総合リストの「備考」欄にそれぞれB、Lとして示してある。これら「子

幼児絵本の評価をめぐって

表 8 総合リスト対「子どもの好きな絵本」のリスト (統計資料)

A. 「子どもの好きな絵本」のリストから見た大人の選んだ本

推薦数	実数	三区 分	両者の評価に 大差なし		総合リストに ないもの ×		子どもの評価 が高いもの >		大人の評価が 高いもの <	
10	1冊	上 21冊	1							
9	1						1			
8	4		3				1			
7	6		4				2			
6	9		5	61.9%	3	14.3%	1	23.8%		
5	14	中 28冊	4		5		5			
4	14		6	35.7%	3	28.6%	5	35.7%		
3	24	下 24冊	5	20.8%	8	33.3%	7	29.2%	4	16.7%
計	73冊	実数	28		19		22		4	
		%	38.4%		26.0%		30.1%		5.5%	

どもの好きな絵本」を含めて検討材料として集計したものが表八である。なお、これらの対比から、上記で古典と判断したもののうち、子どもが余り好んでいないもの、BないしはLとなっていないものは何故であるのか、また逆はどうか考察されうる。

B. 総合リストから見た子どもの好きな本

段階	実数	子どもの好きな本		
		実数	総対比	内対比
I	28冊	18冊	64.3%	24.7%
II	29	12	41.4	16.4
III	28	12	42.9	16.4
IV	28	9	32.1	12.3
V	30	3	10.0	4.1
リスト外	—	19	26.0	26.0
計	143冊	73冊	51.0%	100%

C. ベスト・セラーおよびロング・セラーとの関係

段階	実数	子どもの好きな本 (別掲リスト外の推薦2以下を含む)				
		実数	B	L	B、L、	OBL
I	28冊	18冊	9 (32.1%)	14 (50.0)	8 (28.6)	8 (28.6)
II	29	12	3 (10.3)	9 (31.0)	3 (10.3)	0
III	28	12	3 (10.7)	7 (25.0)	3 (10.7)	3 (10.7)
IV	28	9	2 ( 7.1)	6 (21.4)	2 ( 7.1)	2 ( 7.1)
V	30	3	2 ( 6.7)	3 (10.0)	1 ( 3.3)	1 ( 3.3)
リスト外	—	19	1	11	3	0
計	143冊	73冊	20冊	50冊	20冊	14冊

四最後に、この総合リストに掲げられた絵本それぞれの内容を評価の観点で精査分析すれば、絵本評価の最大公約数的基準が割り出され得るであろう。それは既に公表された各種見解に比べて、より客観化され具体化されたものになるであろう。

以上、この総合リストは、絵本に関する啓蒙と研究両面での資料となりうるものと考えられる。  
(未完)

註

- (1) Robert Hutchins; Education for Freedom: The Great Conversation (一九四三) 田中久子訳『偉大な会話』岩波書店 一九五六年(昭和三十一年)
- (2) 「毎日新聞」一九八一、一〇、二六 朝刊
- (3) J. A. Comenius; Orbis Sensitium Pictus (一六五八)
- (4) ここで筆者は玩具の意味を全く否定しているのではない。とかくある絵本の見方を問題にしているつもりである。なお玩具については別に検討するつもりである。
- (5) 今江祥智『子どもの国からの挨拶』晶文社 昭和四七年
- (6) 「書評に立場があるのか」(『子どもの本棚』八号、一九七三年 明治図書)
- (7) 「絵本はゆっくりかわってゆく」(『月刊絵本』昭和五十一年二月号 すばる書房)
- (8) 『イメージと人間 精神人類学の視野』NHKボックス 昭和四九年、『イメージ、その全体像を考える』NHKボックス 昭和五八年
- (9) 姫路市立めぐみ保育所『はばたく子ども』(昭和五二年)
- (10) 「幼児にとって絵本とは何か」(『現代幼児教育』VOL、四、No.三 昭和四八年、安田生命事業団)

- (11) 『子どもの本と読書を考える』一六五頁 鳩の森書房 昭和五三年
- (12) 「子どもが形をよむということについて」(『日本児童文学』臨時増刊『絵本』昭和四十六年、盛光社)
- (13) 「絵本とは」(右同)
- (14) 『児童文学論』二〇七頁 石井桃子他訳 岩波書店 昭和三十九年
- (15) 『子どもの本の選び方・与え方』二七頁 大月書店 昭和五十七年
- (16) 『親子読書』編集部調査 一九八一年度出版点数 絵本九〇七点、そのうち幼児向五六〇点、低学年向二三六点、(『子どもの本と読書の事典』九二頁 岩崎書店 昭和五十八年)
- (17) 「二冊の『ちからたろう』絵本を比較する」(『日本児童文学』臨時増刊『絵本』昭和四十六年 盛光社)
- (18) 『大人の時間・子どもの時間』一五四頁、一五五頁、理論社 昭和四五年
- (19) 「民衆の手づくりの芸術きりえの魅力」(『日本児童文学』臨時増刊『絵本』昭和四十六年 盛光社)
- (20) 「幼年童話をめぐって」(『学校図書館』九八号 昭和三十三年)
- (21) 「児童文学における価値について」(『子どもの本棚』一七号 一九七六年 明治図書)
- (22) 『絵本の研究』日本文化科学社 昭和五二年
- (23) 「絵本評価尺度の多変量解析」(日本読書学会『読書科学』第二四巻第四号、昭和五五年)
- (24) 『文学教育基礎講座1』明治図書
- (25) 「子どもの本の書評をめぐる現状と課題」(『子どもの本棚』八号 一九七三年、明治図書)
- (26) 「児童文学とはなにか」(『日本児童文学』別冊『児童文学読本』すばる盛光社 昭和五〇年)
- (27) 『子どもと文学』福音館 昭和三五年
- (28) 『子どものための一〇〇〇冊の本——どの本よもうかな?——総合版』風濤社、昭和四九年
- (29) 「特集——絵本の研究と普及の現状」(『学校図書館』三三八号 昭和五三年)
- (30) 『TROIS LIS』創刊号、昭和四四年、聖母女学院短期大学
- (31) 「絵本読者論覚え書」(『子どもの本棚』一四号 一九七五年 明治図書)
- (32) 「生活と文化人の興味性と感動をめぐって」(『子どもの本棚』一七号 一九七六年、明治図書)
- (33)
- (34) 勿論、筆者が当初から筆者の考える絵本観でより明確に取捨選択すべきであったかもしれない。あるいは少なくとも物語絵本に限定すべきであったかもしれない。しかし、とにかくこれらリストは元来、子どもを保育する親ないしは保育者のために啓蒙的に作られたリストであったのである。
- (35) 偕成社 昭和五七年